



Title	自由主義への反逆と「国家的効率」：シドニー・ウェップ研究の視点
Author(s)	岡田, 新
Citation	大阪外大英米研究. 1988, 16, p. 261-287
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99132
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

自由主義への反逆と「国家的効率」 ——シドニー・ウェッブ研究の起点——

岡 田 新

—

華やかなヴィクトリア中期の経済的なブームが、陰鬱な長期不況に取って代わり、威容を誇った自由党が、グラッドストーン (W. E. Gladstone) のアイルランド自治への転向をきっかけについて二つに分裂した1880年代の半ば、植民省に勤務する青年官吏であったシドニー・ウェッブ (Sidney Webb) は、『プラクティカル・ソーシャリスト』(*Practical Socialist*) なる雑誌にこう書いた。

「社会主義者は、政治家のなかでも最もプラクティカルな、眞のオポチュニストでなければならない。」⁽¹⁾

もちろんこの言葉は、失業者の街頭行動の先頭に立ち、やがて「血の日曜日事件」(1887年) で世の耳目を集めることになるハインドマン (H. M. Hyndman) ら社会民主連盟 (Social Democratic Federation) の「革命的」な社会主義に対抗する響きを持っていた。事実、この風采のあがらないコクニーなまりの男、シドニー・ウェッブは、奇矯な駆け出し作家ショー (George Bernard Shaw) に誘われて、1875年にささやかなディベーティングクラブであったフェビアン協会 (Fabian Society) に加入して以来、社会民主連盟等とは趣を異にした立憲的、漸進的な社会主義の構想を練りあげてきていたのである⁽²⁾。1889年、首都を揺るがしたドック・ストライキの年に出版され、フェビアンを一躍世紀末の論壇のスポットライトの中に押し出した『フェビアン社会

主義論集』(*Fabian Essays in Socialism*) の中で、シドニー・ウェップは、現代の社会変革は「民主主義的」、「道徳的」であると共に、「漸進的」であると主張し、少なくともイギリスにおいては「立憲的」かつ「平和的」なものたるべきことを高らかに宣言したのであった⁽¹⁾。

しかし実のところ、この論集は、英雄的にドック・ストライキを支えていた労働組合運動には、一言も言及していなかった。シドニー・ウェップの社会主義は、さしあたり革命はおろか、社会主義者の政党も労働者の政党も、労働組合運動すら、必要とするものではなかったのである。周知のように、シドニー・ウェップは、やがて労働組合運動の研究者となり、第一次世界大戦前からは労働党に加わり、1918年にはアーサー・ヘンダーソン (Arthur Henderson) と共に、労働党の社会主義綱領『労働党と新社会秩序』(*Labour and New Social Order*) を起草することになる⁽⁴⁾。にもかかわらず、実に1912年に至るまで、シドニー・ウェップは、ケア・ハーディー (Keir Hardie) ら地方のフェビアンが創設の中心となった独立労働党 (Independent Labour Party) に加わろうともせず、ピーズ (Edward Pease) が協会の代表として出席していた労働党にも殆ど関心を示さなかったのである⁽⁵⁾。

1892年にシドニーは、富裕な資産家の娘で、チャールズ・ブース (Charles Booth) の社会調査の助手を勤めたベアトリス・ポッター (Beatrice Potter) と結婚する。財政的な安定を得た彼は植民省を辞して、ベアトリスと共に労働組合運動史、地方自治史の実証的な研究に従う。その傍らシドニーはロンドン・カウンティ・カウンシル (London County Council) の議員としてロンドンの社会改革を推進し、またグローブナー通りに構えた自宅での慎しい晩餐会を通じて、ホールディン (R. B. Haldane), グレイ (E. Grey) ら自由帝国主義派 (Liberal Imperialists) の政治家と親交を結び、更にローズベリー卿 (Lord Rosebery) やバルフォア (Balfour) ら政界のトップ・リーダーの間に「浸透」(permeate) していったのであった。

こうして政界の領袖達と親しげにディナー・テーブルを囲んでいたシドニー・ウェップが労働党に加わるのは、夫妻が心血を注いで書き上げた社会保障制

自由主義への反逆と「国家的効率」

度の体系的な提案である『救貧法調査委員会少数派報告書』(*The Minority Report of the Poor Law Commission*)が、政界のリーダー達に受け入れられず、自ら起こしたマイノリティー・レポート実現のための全国キャンペーンも、ロイド・ジョージ(Lloyd George)の「人民予算」をめぐる「憲政危機」の嵐の中で、惨めな失敗に帰してしまってから後のことであった。

労働党に加わったシドニー・ウェッブは、まもなく労働党議員としてそのフロント・ベンチに座る。そしてマクドナルド(Ramsay MacDonald)の二度にわたる政権では、商務省長官、植民省長官としてキャビネットの一員となった。しかし「マクドナルドの裏切り」の後、バスフィールド卿(Lord Passfield)としてハンプシャーに引静てから、ウェッブ夫妻は自らの過去の思想を否定し、スターリン治世下のソ連邦を称える著作を発表して、再び人々を驚かせたのであった。

シドニー・ウェッブのこうした激しい政治的変遷は、後世の歴史家を少なからず悩ませてきたと言わなければならない。シドニー・ウェッブの言うプラクティカルな社会主義の拠って立つべき基盤とはどのようなものであったのか。その類まれなオポチュニズムを可能とし、必要としたものは何であったのか。また、19世紀末から20世紀初頭のイギリス政治に対する彼の貢献は、どのようなものであったのか。シドニー・ウェッブの錯綜した政治的軌跡は、こうした論点についての正確な解答をはなはだ難しいものとしてきた。その結果、シドニー・ウェッブの活躍は、何程かミステリアスな「神話」として取り沙汰されることとなったのである。

こうしたシドニー・ウェッブの知的、政治的な営みを内在的に理解するためには、何よりも彼が生きた19世紀末以来の激動するイギリスの政界、思想界の厳しい緊張と対立の中に、彼の姿を置いてみなければならない。こうした歴史的なコンテクストに照らすことによって初めて、ウェッブの一見まことに無原則な、動搖常ないオポチュニズムは、ヴィヴィッドな意味を持つものとして、甦ってくるはずだからである⁽⁶⁾。この小論は、欧米における研究史上の優れた

成果を批判的に検討することによって、この課題にアプローチする手掛けかりを得ようとする試みに他ならない。本稿ではまず差当り、第一次大戦前までのシドニー・ウェッブの政界への「浸透」の意義について、学問的な研究の出発点をなすと思われる戦後初期の代表的な研究をとりあげ、その成果を筆者なりの観点から批判的に吟味することにしたい⁽⁷⁾。

二

25年間にわたってフェビアン協会の書記を勤めたエドワード・ピーズは、シドニー・ウェッブやペアトリス・ウェッブ、バーナード・ショウらの協力を得て、1916年に『フェビアン協会の歴史』(*The History of the Fabian Society*)を上梓した。もとよりこれは客観的な歴史研究ではない。しかしピーズはこの著作で、フェビアン社会主義の思想的な独創性とそのイギリス政治への貢献を誇らしげに叙述し、フェビアニズムの史的評価に自ら先鞭を付けたのである。

ピーズによれば、フェビアン協会こそイギリスにおいて「マルクス主義の魔力」を打ち破った存在であった。フェビアンは、『資本論』をバイブルとする排他的なドグマから、イギリスの社会主義を解放した。そして革命のパナシアに代えて、フェビアンは「思想の自由」の上に立脚する、社会主義への漸進的な進化の理論を打ち建てたのである⁽⁸⁾。

フェビアンが実際にどれほどこの進化を押し進めたのか、ピーズは論定を後世に委ねようとする。しかしピーズの叙述に従えば、フェビアンはロンドンの社会改革（「ガスと水道の社会主義」と教育改革）の前衛的な推進者であったばかりではない。自由党全国連盟 (The National Liberal Federation) が採択した「ニューカッスル綱領」(1891年) の社会改革のプログラムも、フェビアンのアジェンダがもたらした「結果」であった。また、バルフォア教育法(1902年)も、シドニー・ウェッブの統一党への「浸透」の輝かしい成果に数えられた。更に『少数派報告書』自体は実現しなかったものの、老齢年金制度についてのシドニー・ウェッブの意見や提案は、政府案作成に「大きな影響」をもたら

自由主義への反逆と「国家的効率」

らした、とピーズは言うのである⁽⁹⁾。

もっともピーズは、ボア戦争やバルフォア教育法、関税改革などをめぐって、協会内部に鋭い対立があったこと、19世紀末には、フェビアンは自由党の未来を見誤り、1906年の自由党の大勝利を予想だにしなかったことを率直に認める。また彼は、老齢年金法や国民保険法などが、結局フェビアンのプランとは違った形をとったこと、ロンドンのフェビアンは自由党に失望して一時労働組合を基盤とする政党を提唱したが、独立労働党を押し進める地方のフェビアンとは、常に一線を画していたことを冷静に記録している。しかし歴史学者ならぬピーズは、フェビアンの影響を客観的に検証しようとしたわけではない。またピーズは、ウェップやショーが自由帝国主義者と結んだ同盟関係については、殆ど言及することがなかったのであった⁽¹⁰⁾。

その後、1934年にはハミルトン (Mary A. Hamilton) による夫妻の伝記が出版され、ベヴァリッジ (Lord Beveridge) やトニー (R. H. Tawney) らによるウェップ夫妻についてのエッセイや、さまざまな立場からするフェビアン社会主義に対するクリティカルな批評が数多く世にあらわされた。しかし1945年のアトリー (Clement Attlee) 労働党政権の成立は、フェビアン社会主義に対する本格的な学問的歴史研究を一気に促すきっかけになったと言ってよい。多くのフェビアンを内閣に配した、史上初めての労働党多数派内閣の誕生を背景として、1950年代から1960年代にかけて、フェビアン社会主義の理論とその歴史的役割について、幾つもの著書や学位論文が書かれることとなったのである⁽¹¹⁾。

マーガレット・コール (Margaret Cole) は、ペアトリスの伝記を執筆し、ペアトリスの日記やウェップの業績に関する論集の編者となって、この時期のフェビアン研究の先頭に立っていた⁽¹²⁾。1961年に出版された彼女の『フェビアン社会主義の歴史』(*The Story of Fabian Socialism*) は、ピーズが筆を置いて以降の協会の歴史をたどると共に、ペアトリスの日記など、ピーズが用いなかつた資料に基づいて、協会史の枠を超えたフェビアン社会主義の歴史を描き出そうとしたものであった。

ピーズと同様にM・コールも、フェビアンはドグマティックなものの考え方を排し、国家を抑圧の道具とみる見方を退けることによって「マルクス主義の魔力を打ち破った」と結論づける。更にフェビアンは、イギリス社会主義に「寛容なディスカッションの精神」と事実を踏まえたプラクティカルな改革の重要性を教えた。女史はこう付け加える。フェビアンはこうした手段を駆使することによって、貧困が個人の責任でも避け難い災厄でもなく、「ナショナル・ミニマム」の実現によって防止しうるものであることを明らかにし、世論を大きく転換する上にかけがえのない貢献をした。こう女史は論ずるのである⁽¹³⁾。

しかしフェビアンが、独自の哲学と呼びうるようなものを造ることができなかったことを女史は鋭く指摘する。またフェビアンにはその影響力を過大評価する傾向があったことを女史は見逃さない。かくして「ニュー・カッスル綱領」へのフェビアンの貢献についても彼女は断定を避ける。女史の評価に従えば、ウェップやショーは、「重要で影響力を持つ」人々への「浸透」に関心を抱いていた。にもかかわらず、実は彼らは現実政治を動かす能力に欠け、自由党的政治家とも労働者側の政治家ともうまく折り合うことができなかつた。そのあげくウェップらは、ホールディン、ローズベリーといった「誤った馬」に「浸透」の成否を賭けてしまったのである。女史によれば、自由党と統一党の双方を「浸透」の対象にすることもつ危うさを、ウェップは充分に理解していかつた。更にボーア戦争やバルフォア教育法、関税改革でフェビアンがとった態度も、社会主義、急進派の歴史の中では、際立って「特異」なものであった、と女史は冷静に観察する⁽¹⁴⁾。

フェビアンが残した遺産として、M・コールは教育改革と労働党的社会主義綱領、そして社会保障制度を数え上げる。しかし彼女は同時に、バルフォア教育法によってウェップがロンドンでの基盤を失う結果になったこと、第一次大戦まではウェップは労働党に何ら関係を持たなかつたこと、『少数派報告書』は、主として数十年後の社会政策の先駆けとして意義があつたことを書き添えるのを忘れていない⁽¹⁵⁾。こうしてM・コールは、フェビアンの業績の大きさをうたいながらも一方では、フェビアンの哲学の独創性やその社会政策史上の

自由主義への反逆と「国家的効率」

貢献に、醒めた目で一定の限定を付していたのである。しかしコールは、セルフ・ヘルプの体制からの脱却というすぐれて巨視的な観点から、あくまでフェビアンの持つ先駆性を強調したのであった。

だが、19世紀末から20世紀にかけてのイギリスの思潮の変貌を、セルフ・ヘルプからいわゆる「福祉国家」への転換という枠組みに押し込め、その線上でフェビアンを評価し、それ以外の側面をいわば非本質的なエピソードとして片付けることは、歴史を余りに単純化することになろう。自由党の分裂、内部抗争、労働党の形成、統一党的分裂、自由党的勝利と衰退といった激動するイギリス政治の全体像を捉え、その中におけるフェビアンの位置を客観的に見定めるには、この枠組みは決して充分なものではない。この観点からみればM・コールの著書は、フェビアン協会の中にもっぱら視点を据えた運動の記録という性格をなお拭いきれていなかった、と言わねばならないのである。

これに対してオーストラリア人の研究者マクブライア (A.M. Macbriar) が1962年に公刊した研究、『フェビアン社会主義とイギリス政治、1884年—1918年』(*Fabian Socialism and English Politics, 1884–1918*) は、第一次世界大戦前後までのフェビアンの理論とその「影響」をつき放したクリティカルな目で分析した画期的な著作であった。

まずマクブライアによれば、フェビアンの社会主義理論は「高度なレベルの理論的な独創性」を持たない、「折衷的」なものに過ぎなかった。マクブライアは、イギリスにはもともと「マルクス主義の魔力」など存在はしなかったことを指摘し、先程みたピーズらの主張に反駁する。もっとも、マクブライアも、フェビアンが「意識的に組織された社会」という新しい理念を、イギリス人に「飲み下しやすい」形で提示したこと認めないわけではない。しかし、ナショナルなレベルにおける社会改革について見る限り、この時期のいかなる重要な政治的発展も、確証を持ってフェビアンの功績に帰すことはできない。これがマクブライアの結論であった⁽¹⁶⁾。この点について、今少し詳細に彼の分析をみておくことにしよう。

先にも触れたように、1891年に採択された自由党の「ニューカッスル綱領」は、土地改革や労働災害に対する資本家の補償責任の拡大といった社会改革の方針を打ち出した。老グラッドストーンも、この綱領に公的な支持を与え、自由党はいよいよ都市労働者層への支持基盤の拡大を求めて積極的な社会改革に乗り出すかにみえたのである。ピーズやショーは、この綱領がフェビアンの自由党への「浸透」の成果であることを盛んに宣伝した。しかしマクブライアはこれに異を唱える。マクブライアによれば、フェビアンは確かに綱領を採択した自由党全国連盟の大会に出席していた。しかし実際にはシドニー・ウェップは、動議を提出することもできず、綱領の策定にはなんら重要な役割を果たさなかったのである⁽¹⁷⁾。

現実にはグラッドストーンは、その最後の内閣（1892年—1894年）で、老いの一徹とも言うべき頑固さでアイルランド問題に没頭し、国内の社会改革の課題は、事実上店晒しとなる。グラッドストーン政権の消極的な姿勢に直面したフェビアンは、折からケア・ハーディーら地方のフェビアンが進めていた独立労働党への支持と、自由党への「浸透」策の間を揺れ動くことになった。こうマクブライアは観察する。彼の分析に従えば、ロンドンのフェビアンは以前からその内部で、自由党への「浸透」か、独立した労働者政党かをめぐって対立していた。この中で、ショーやウェップは一貫して、第三党の構想に冷淡な態度をとっていたのである。とはいって、1893年のブラッドフォードでの独立労働党の結成大会には、ロンドンのフェビアン執行部もショーを代表として送った。そして、シドニー・ウェップとショー自身、同じ年の11月、『フォートナイトリー・レビュー』(Fortnightly Review) に寄せた論文の中で、グラッドストーン政権への忿懣をあらわにし、独立した労働者政党の必要を示唆したのであった⁽¹⁸⁾。しかしマクブライアは、これが必ずしも独立労働党への支持へと直接につながらなかった点に注意を促す。労働組合会議 (Trade Union Congress) が、1893年、1894年の大会で、独立労働党を当面財政的に支援する意向のないことを明らかにし、また1895年の総選挙で独立労働党が一つの議席も獲得できなかつたのを見てとると、シドニーやショーはこの方向をそれ以上

自由主義への反逆と「国家的効率」

追求することなく、ふたたび自由党への「浸透」策へと立ち戻ったのである。

彼らは結局、自由党内でグラッドストーン派と抗争する自由帝国主義派に政界への足がかりを求めた、とマクブライアはみる。1901年には、ボア戦争への賛否をめぐって分裂した自由党にあって、反ボア派を率いるローズベリーに、シドニー・ウェップは「国家的効率」を促進するような政界の刷新を期待する筆を執った⁽¹⁹⁾。しかしながら、マクブライアの観察するところでは、このウェップの期待は、決して充分に報われなかった。シドニー・ウェップらは、まとまりのない自由帝国主義派の力量を過大に評価し、中間派のリーダーとして自由党の舵を握るキャンベル・バナマン (Campbell Bannerman) を低く評価しそぎていた。またシドニー・ウェップは統一党と共に、バルフォア教育法を推進した時、この法案が国教会の宗教教育への公的扶助を意味するものとして、自由党や独立労働党内の非国教徒から激しい反対を受けとることを見落としていた。一方ウェップらがあてにしていた自由帝国主義派の政治家は、フェビアンの政策を自己の政治的野心を満たすうえで利用することしか考えてはいなかった。マクブライアはこう厳しく指摘する⁽²⁰⁾。

かくて1903年に始まるチェンバレンの関税改革キャンペーンで四分五裂になった統一党の後を受けて、1905年にキャンベル・バナマンが政権を握ると、自由帝国主義者は結束を失って内政ポストから遠ざけられ、ウェップらは社会改革の立案者たる機会を逃してしまった。マクブライアはこう論ずる。もちろんマクブライアも、自由党政権下で立法化された老齢年金制度や、苦汁産業の低賃金規制等を、フェビアンが早くから提唱していたことを見落としはない。しかしマクブライアによれば、実際に立法化をもたらしたキャンペーンのリーダーシップは、必ずしもフェビアンの手にはなかった⁽²¹⁾。更にマクブライアのみるところ、ベアトリス・ウェップは、救貧法調査委員会の多数派に、社会的な原因による貧困の発生の事実を認めさせ、悪名高い「劣等性の原理」(principle of less eligibility) の部分的な緩和や、救貧委員会 (Poor Law Guardians) 制度の撤廃を答申に盛込ませる上で、かなりの「影響」を及ぼした。しかし彼によれば、救貧法体制の何らかの抜本的な改革の必要は、実はベ

アトリスを待たずとも、すでに多くの委員の共通の認識となっていた。そして、ペアトリスが追及した最大のイッシャーである「劣等性の原理」の破棄と、中央集権的な効率的救貧行政組織の創出については、彼女は説得に失敗した。しかも政治家は、バルフォアもアスキス (Asquith) も、ペアトリスの『少数派報告書』はおろか、『多数派報告書』すら一向に具体化しようとはしなかった。一方でウエップ夫妻は、ロイド・ジョージやウィンストン・チャーチル (Winston Churchill) が準備した健康保険、失業保険のスキーム、特にその保険料納入義務の原則に厳しく反対しつづける。だが皮肉なことに、こうした社会保険制度を盛込んだロイド・ジョージの「人民予算」をめぐる「憲政危機」が世論を沸き立たせる中で、『少数派報告書』の実現をめざす夫妻のキャンペーンは息絶えてしまった⁽²²⁾。マクブライアは、こうした経過をつまびらかにして、ウエップの活躍の限界を明らかにするのである。

他方、マクブライアによれば、結成時の独立労働党とフェビアンとの間に、政策上の大きな隔たりは見られなかった⁽²³⁾。しかし1890年代を通じて、独立労働党を率いるケア・ハーディーやマクドナルドと、ウエップ、ショーランドンのフェビアンのリーダーとの間の政治的な意見の亀裂は、次第に深いものとなってゆく。ケア・ハーディーやマクドナルドは、もともとウエップやショーの「浸透」策に、不信の念を抱いていた。だがロンドン・スクール・オブ・エコノミクスの創設資金となったハチソンソン基金 (Hutchison Trust) の使途をめぐってウエップと衝突したマクドナルドは、ボア戦争では決然として親ボアを表明し、ついにフェビアン協会を去る。また独立労働党は、全体としてもフェビアン協会とは対照的に反帝国主義、親ボアを掲げ、ウエップらが推進したバルフォア教育法にも鋭く反対した。しかしマクブライアによれば、このボア戦争への態度こそ、自由党を二分した世紀転換期のイギリスにおける最大の政治問題に他ならなかった。従ってこの問題をめぐる「当時の主要な政治的配置」の上で、フェビアンと独立労働党は、明らかに相入れぬ対立した陣営に分かれていた。マクブライアはこう指摘するのである。反ボア

自由主義への反逆と「国家的効率」

派に属する自由帝国主義派や統一党と組んで社会改革を推進しようとしたウェップらと、親ボーア派自由主義と独立労働党との協力関係を展望したハーディー、マクドナルド。この真に興味深い対抗の構図を、マクブライアは示唆するのである⁽²⁴⁾。

労働組合会議を説得して、自由主義的な労働組合と社会主義者との連合体として、労働代表委員会 (Labour Representation Committee, 1900年) を創設し、タフ・ベール判決 (Taff Vale Case, 1901年) に脅威を感じた労働組合を結集させて、労働党へと発展させていくイニシアチブをとったのは、マクブライアの見るところ、明らかにこの後者であった。労働党は、次第に鉄道の国有化や医療の国営といった「社会主義」的政策を採用してゆく。しかしその推進者も、マクブライアのみるところ、独立労働党の人々であった。ピーズを通じてフェビアンの執行部が労働党の政策に影響を及ぼしたのは、議員選挙のための共通のファンドの設立と、八時間労働日の選択的実施の方策という、二つの限られた領域に過ぎなかった、とマクブライアは結論づける。1903年に、シドニー・ウェップが労働争議に関する調査委員会 (Royal Committee on Trade Dispute) の委員になった時も、労働組合会議はこれをボイコットし、労働争議の強制的仲裁を是とするシドニー・ウェップの主張は、労働組合会議にも、独立労働党にも全く受け入れられなかつた。この象徴的な事実にマクブライアは注意を喚起するのである⁽²⁵⁾。

マクブライアは、労働党の政策が「非革命的なコレクティivism」として、フェビアンの思想と一般的には似通っていたことを否定しない。しかし彼は、労働党の初期の発展に対するフェビアンの具体的な貢献は、マイナーなものに過ぎなかつたとみなし、それももっぱら、独立労働党の中にいるメンバーによるものであった、と結論を下す。かくしてマクブライアは、ウェップらの統一党、自由党への「浸透」が、深刻な政治的誤算の上に成り立っていたこと、他方労働党への彼らの貢献は、ごく限定されたものであったことを明らかにし、華々しい政治家との交際ぶりにもかかわらず、その成果は決してはかばかしいものではなかつたことに注意を促す。マクブライアのきめ細かな分析からは、

こうして自由党の急進派とも独立労働党とも距離を置き、自由帝国主義派を盟友として仰ぎながら、結局充分な成果を挙げえなかつた、以外に孤立した第一次大戦前までのウェップらの姿が浮かび上がつてくるのである。

三

しかしながらシドニー・ウェップらは、何故自由党の帝国主義派や統一党への「浸透」策にこれほど固執したのであろうか。別言すれば、シドニー・ウェップ達はどうして、自由党の急進派や独立労働党の路線と歩調を合わせることができなかつたのであろうか。そこには単なる人脈や、政治的な誤算といったものを越える本質的な意味や理由が存在したのであろうか。

マクブライアーも、フェビアンの社会主義理論を丹念に要約、描写する中で、シドニー・ウェップやショーが、「グラッドストーン的自由主義」をトータルに否定しようとしていたこと、社会有機体観や、「適者生存」という流行の発想をその思想の中に取り込んでいたことに言及している。しかし社会改革のドミナントな担い手というフェビアンの偶像に挑戦しようとしたマクブライアーや、フェビアンはその非革命的、妥協的な性格の故に、オリジナルな理論を発展させる動機に乏しかつたとし、まとまつた哲学や社会理論を築き上げることなく、あくまでも「折衷的」な思想にとどまつたという点に、フェビアン社会主義に対する評価のポイントを置いていた。

確かに、革命的な社会主義との対比で言えば、フェビアニズムがいわゆるブルジョア的な社会理論の「古い」枠組みに「満足」していた、と論ずることは誤ってはいない。良く知られているように、シドニー・ウェップやショーの経済理論は、リカードー (David Ricardo) の地代理論の拡大という形をとっていた。その経済学説史的な意義は議論の余地があるとしても、少なくともフェビアンの理論が、マルクスの古典派経済学批判のような独創性や体系性を持っていなかつたことは、何人も否定できないところであろう。

しかしながら、当時の具体的な状況においては、資本主義の揚棄はもちろん

自由主義への反逆と「国家的効率」

イギリス政治の実践的な課題にのぼってはいなかった。イギリスの世論を沸騰させたクルーシャルなイッシャーであったのは、ヴィクトリアン・リベラリズムの体制の変革、すなわちセルフ・ヘルプに代わる積極的な国家干渉、パクス・ブリタニカを脅かし始めた列強に対する軍事的経済的な対抗、イギリスの圧倒的な生産力の優越を前提としてきた自由貿易体制そのものの是非、といった問題であった。こうした状況下で、ウェップらは、革命的な社会主義と袂を分かつたばかりではなかった。彼らは、資本家や既存の政治勢力に対して単に「妥協的」「折衷的」であっただけでもない。政党政派から中立的な距離を保っていたのもなかった。彼らは、土地貴族の特権に戦いを挑んできた急進派や、労働者を基盤とする独立労働党と離れて、「帝国主義者にして、コレクティビスト」(ペアトリス)である自由帝国主義者に、最も親密な政治的盟友を求めたのである。マクブライアーも言うように、イギリスにおいては革命的な社会主義はネグリジブルな勢力であった。一方、現実的な社会改革は左右両翼に属するさまざまな潮流によって主唱されたのである。この中でウェップらが「浸透」を標榜しながら、自由党内でむしろ右翼的潮流と目される派閥や、統一党と手を結ぶことを選んだことは、単に「折衷的」「妥協的」といった特徴付では、捉えきれないものを含んでいる。マクブライアーやこのフェビアンの政治的選択が、その影響力を妨げる結果となったことを明らかにした。しかしまくブライアーやの場合は、このフェビアンの特異なスタンスは、いわばフェビアンの無原則的な戦術の所産という方向から捉えられ、この戦術を産み出した原理的な思考の問題は、必ずしも充分に掘り下げられなかつたのである。ウェップらの政治戦略の特異性を充分に捉えるためには、自由党急進派や独立労働党とフェビアンの間の距離を生みだし、自由帝国主義とフェビアンとの同盟を支えたより積極的な根拠が探られねばならないであろう。

マクブライアーやの著作と前後して出版されたセンメル (Bernard Semmel) の『帝国主義と社会改革、イギリスの社会帝国主義の思想、1895年—1914年』(*Imperialism and Social Reform; English Social-Imperial Thought, 1895–1914*)

は、フェビアンの研究としては、ごく部分的な政治論を扱っているに過ぎない。しかし、センメルの研究は、より広い分脈の中にフェビアニズムを置こうとする上で、興味深い論点を提起したのであった。

センメルはフェビアニズムを、帝国の強化の一手段として社会改革を推進する「社会帝国主義」とも名付けるべき思想傾向の一角に位置づける。センメルによれば、その典型というべきベンジャミン・キッド (Benjamin Kidd) やカール・ピアソン (Karl Pearson) のいわゆる集団外的社会進化論 (external Social Darwinism) は、社会の中にではなく、社会有機体相互間に生存競争のフィールドを想定し、この角度から帝国主義を正当化すると共に、社会有機体の強化のための内的な改革の必要を根拠づけた。これと符節を合わせて政治のアーリナでは、ボーア戦争での軍の失態、ドイツ、アメリカからの熾烈な経済競争を眼前にして、グラッドストーン後の自由党の一翼を率いるローズベリーが、イギリスの誇る「海軍と資本」をフルに活用して帝国の権威を再確立することを叫んでいた。ローズベリーは、その不可決の一環として、壮健な帝国の臣民を創出するための積極的な社会改革＝「国家的効率」の促進を提唱したのであった⁽²⁶⁾。

センメルは、フェビアンがローズベリーら自由帝国主義者と本質的に「共通の信念」を分かちあっていた、と考える。センメルによれば、シドニー・ウェッブは、ピアソンの理論やその「人種の劣悪化」の警告に少ながらぬ共感を覚えていた⁽²⁷⁾。またショーは、『フェビアニズムと帝国』⁽²⁸⁾ (*Fabianism and Empire*) なる著作の中で、自由急進主義の「小英國主義」を排して、「文明世界全体」のために、高い文明的な価値のある国の拡大を支持するという立場を打ち出した。こうした「共通の信念」を土台として、フェビアンは自由帝国主義者と腕を組み、「国家的効率」をスローガンとする新党の樹立をもくろんだ、とセンメルはみる。ウェッブ夫妻が1902年に設立した政界、学界の名士によるクラブ、コエフィシェンツ (Coefficients) は、文字通りこの新党のための「頭脳」たるべき存在であった。しかし、センメルによれば、チェンバレンの関税改革論がこの試みを挫折させたのである。自由貿易の上に立つ帝国か、或いは

自由主義への反逆と「国家的効率」

保護貿易や特恵関税の上に立つ帝国をめぐって、金融、綿業、造船、金属など、さまざまな産業の利害が対立し、統一党も混乱を極めた。コエフィシェンツのメンバーも、国家の将来を決するこの枢要な問題に一致した結論を得られず、結局散り散りとなってしまった。センメルはこうみるのである⁽²⁹⁾。

かくしてセンメルは、フェビアニズムの内にコブデン主義的自由主義や、独立労働党の人々が抱いていたインターナショナルな理念とは全く異質な思想をみてとる。端的に言えば、それは社会ダーウィニズムに足を置く、国家主義的な立場から産業の拡大を追及する思想であった。しかしほんの研究はもっぱら政治論の次元にとどまり、思想の構造について、立入った検討を加えていたわけではない。また彼は、社会有機体理論や進化論の影響を受けながらも、そこから反帝国主義的な思想を発展させ、親ボーア派に与したホブソン (J. A. Hobson), ホブハウス (L. T. Hobhouse) やマクドナルドのような、新自由主義や独立労働主義と、フェビアンとの違いを指摘しながら、その相違を生みだしたものを中心とし、鮮明にしてはいない⁽³⁰⁾。更にセンメルの研究は、フェビアンの帝国主義的側面を強調する一方で、ボーア戦争に至るまで外交問題はフェビアンの関心の外にあったことを認めていた。しかしもし帝国主義的拡大が、イクスピリットにフェビアンの中心的教義に座っていたとすれば、ボーア戦争に際してフェビアン協会が真二つに割れて激論を戦わせることは、起らなかつたであろう。マクドナルドら後の親ボーア派も、最初から協会に加わらなかつたであろう。このように考え得るとすれば、この時期のイギリス政治思想における社会改革と帝国主義、社会進化論と自由主義の関係は、センメルの叙述よりも一層複雑なからみあいの内にあったように思われるのである。

一方、ホブズボーム (E. J. Hobsbawm) は、マクブライアーやセンメルの研究が公刊される前に注目すべき学位論文『フェビアニズムとフェビアンズ、1884年—1914年』(Fabianism and Fabians, 1884–1914) をケンブリッジに提出していた。ホブズボームにとっても、ウェッブ夫妻の「浸透」は、全体としては明らかに惨めな「失敗の連続」であった。この時期の「重要な法律のどれ一

つをとっても、フェビアンやウェップ夫妻の影響が決定的であったと考えることは難しい」とホブズボームは宣言する⁽³¹⁾。

だがホブズボームは、このウェップらの政治的な孤立の持つ思想的な意味に、更に一步突っ込んだ分析を加えていた。彼は、センメルのようにフェビアンを「社会帝国主義」というカテゴリーに一括してしまうことはしない。そもそも激しい対立を一度ならず経験したフェビアンの思想を、一つのものとして論ずること自体、「ミスリーディング」だと彼は考える。それゆえホブズボームは、フェビアンの理論的な指導者として名声を欲しいままにしたシドニー・ウェップとペアトリス・ウェップにまず照準を合わせて、その思想的発展をたどり、ショーやその他のフェビアンには、別に短い分析を加えるという手法をとるのである⁽³²⁾。

しかしホブズボームは、フェビアンを「社会主義や労働運動の歴史」という観点から位置付ける常識的なアプローチには、大胆な異議を提出する。彼は、フェビアンをむしろミドル・クラスの反レッセ・フェールの思想的な流れの中に位置づけるのである。後のホブズボームの表現を用いれば、フェビアンは社会主義運動や労働運動の「本質的」な構成部分ではなかった。フェビアンは「帝国主義時代へのミドル・クラスの一つの適応」に他ならなかったのである⁽³³⁾。

マルクス主義者たるホブズボームにとって、フェビアンはニューディーラーと同じく、国家の力を用いて「既存の秩序」をより「効率的」で「より確固」としたものにしようとする「改革者」でしかなかった。しかし彼によれば、自由競争が支配し、社会主義者が長く歴史の表舞台から姿を消してしまっていた19世紀末のイギリスにあっては、「古典的なマンチェスター型」の自由競争的資本主義が、資本主義という「システム一般」と広く同一視されていた。それゆえ、国家干渉的な「改革者」に過ぎぬフェビアンも、ビスマルクの「国家社会主義」と共に、「絶対的に自由な企業システム」への挑戦者、ポジティブな国家の推進者という意味において、「社会主義者」ないし「コレクティivist」と呼ばれたのであった⁽³⁴⁾。

だが分析的にみれば、フェビアンの漸進主義や干渉主義的経済論は、「本来

自由主義への反逆と「国家的効率」

の社会主義や1865年以前の自由急進主義」とは、思想的起源を異にするものであった、とホブズボームは主張する。フェビアニズムの思想的源泉は、彼によれば、19世紀中葉からミドル・クラスの中に頭をもたげてくる、自由な企業社会の福音への黒い疑念の中に求められるべきなのである。裕福で敬虔な中産階級が、社会の底辺に淀む貧困に対して感ぜずにいられなかつた「罪の意識」。それと同時に広がる労働者階級の政治的力への不安。国家干渉によって経済を「管理」しようとする「混合経済」の発想。ベンサム主義的演繹に代る社会有機体と進化の理論。こうしたレッセ・フェールに疑問を呈するさまざまな発想や流行の学説を、フェビアンは「アンシステマティック」に攝取していった、とホブズボームは捉える⁽³⁵⁾。

こうして形成されたフェビアンは、ドゥローイング・ルームでのくつろいだディベートをこととし、当時の騒然とした労働運動にも、協会としては超然と距離を保っていた。だがまさにそれゆえに、「血の日曜日事件」以降革命家の街頭演説がすっかり色褪せてしまった時、「革命は支持しないが、社会改革には共感を覚える」ミドル・クラスのサポートを急速に集めることになった、とホブズボームは言う。しかしホブズボームによれば、フェビアンは単に「革命的」なマルクス主義を拒絶したばかりではなかった。それはトインビー・ホール (Toynbee Hall) に代表される、貧しきものへの博愛主義的奉仕の精神とも違う独特な新しい、「道徳的世界」を打ち出したのである。

では、「被抑圧者のセルフ・インタレスト」とも、山上の垂訓的な倫理とも違うシドニー・ウェップの社会主義の思想的な核心はどこにあったのか。ホブズボームに従えば、シドニー・ウェップは、徹底したアンチ・レッセフェールの闘士であった。しかしシドニーは「社会正義」への義憤からだけレッセ・フェールを攻撃したのではない。彼の特徴は、すぐれて「技術的効率性」の見地からレッセ・フェールに戦いを挑んだところにあったのである。

ホブズボームによれば、若き日のシドニー・ウェップは、この「効率」の問題に心を奪われていた。彼は、「非効率的」な地主や家族経営の中小企業を容赦なく攻撃し、人道的博愛的な立場とは違う「技術的効率性」の見地から、

8時間労働日を擁護した。またロンドン・カウンティー・カウンシルにおけるシドニーの業績は、何にもまして技術教育の振興という分野にあった。「資本の必要」('the Need of Capital')と題された小論で、シドニー・ウェップは、「個人主義」を不正義であると共に、非効率的な原理として退け、資本の破棄ではなくその増大こそ、技術的進歩の必要条件であるとあけすけに論じていた。ここにホブズボームは注目する⁽³⁶⁾。

こうした「効率」への執着の前提となっていたのは、個人に絶対的に優越する社会有機体という思想であった。ホブズボームはこう指摘する。シドニー・ウェップにとって、社会有機体は個人の集合を越える一個の生命体であり、個人はその有機的機能を担う一器官に他ならなかった。しかもこの社会有機体は、相互に激しい生存競争を戦っている。「効率」とは、激しい生存競争の渦中にあるこの社会有機体の組織的な能力を表示する科学的な基準であり、社会有機体の生存競争は、個々の成員の能力によってではなく、この有機体全体の能力=効率によって決せられると考えられたのである。

ホブズボームは、センメルより遙かに体系的に、若きシドニー・ウェップの著述からこうした集団外的な社会進化の論理を抽出してくる。だがこの世界像は、個人主義を最奥の基礎とする「古い自由主義的急進主義」はもちろん、インターナショナリズムを一つの柱とするオーソドックスな社会主义とも「共有すべきものを殆ど持たなかった。」逆にこの世界像こそ、「ビスマルク流のコレクティビストであるホールディングのまわりに形成された帝国主義者のグループ」と、シドニー・ウェップとの親密な政治的協力の礎であった。ホブズボームはこう論ずるのである⁽³⁷⁾。

シドニー・ウェップが、この社会有機体の内部に、地主、資本家、労働者と並んで、「サラリーを受取る専門職」(the salaried professional)を置いたことに、ホブズボームは重要な意義を認める。ウェップは、この社会階層を「能力」によって生活し、階級闘争の外にあって、社会有機体の「効率」を促進する中心軸と考えた。彼の経済理論も、実はこうした観点と密接に結びついていた、と

自由主義への反逆と「国家的効率」

ホブズボームは分析する。

ホブズボームのみるところ、シドニー・ウェップの経済理論の想源は、アメリカの経済学者ウォーカー（F.A. Walker）の「高賃金経済論」であった。ウォーカーは、企業家の受取る利得を、土地の豊度の差異によって生じるいわゆる「差額地代」と同様に、企業家の経営能力の差異によって生ずる一種の「レント」（Rent）とみなした。そして、リカードの経済学における「地代」と同じく、「耕作限界」にある最も非効率的な経営が基準となって、この「レント」が決定される、とウォーカーは論じたのである。ウォーカーは更に、人為的保護策と共に、労働者が低賃金や劣悪な労働条件に甘んじていることによって、こうした非効率的な企業は自由競争による淘汰から免れ、いたずらに「レント」の水準を押し上げ社会全体の「効率」を阻害していると主張したのである⁽³⁸⁾。

フェビアンの経済理論は、このウォーカーの議論を一步拡大したに過ぎない、とホブズボームは考える。シドニー・ウェップらは、ウォーカーの議論に加えて、投資家の受け取る利得をも「レント」の一種とみなし、「図式」を完成させた。ウェップらは、土地と同様、技術や資本においても、その稀少性と経済的なアドバンテッジの差異に従って「レント」が発生すると想定し、この「レント」こそ、社会全体の経済の拡大から生ずる「不労所得」、「剩余価値」であると定義した。そしてこの「レント」の公的所有への漸次の移行過程として社会主義が位置付けられたのである。ホブズボームの評価に従えば、この「レント」理論は、労働価値説からは引き出すことが難しい、社会主義へのグラジュアリズムを容易に正当化した。またこの理論は、「寄生的なランティア」、「怠惰な独占」を除くあらゆる「効用の生産者」を社会主義の受益者として定義することによって、「不労所得者」に対する勤労の倫理の闘争という、急進的な伝統の継承者としてフェビアンを描きだしたのである⁽³⁹⁾。

しかし同時にこの理論は、プロレタリアートから、価値の唯一の生産者、革命の担い手という地位を奪い去った。この点にホブズボームは注目する。ウェップにとっては、資本家と労働者（厳密に言えば、マニュアル・ワーカー）の階級闘争は、セクショナル・インタレストに固執するものとして、進歩への障

害でしかなかった。これに対してシドニー・ウェップが、未来への抛りどころとしたのは、物質的報酬よりも能力を發揮する喜びを重視する、知的なエキスパート達の公平な理性と、これを涵養する教育の力であった、とホブズボームは論ずる。この点、意外にもシドニー・ウェップは、「啓蒙思想家やユートピア思想家」の系譜に立っている、とホブズボームはみるのである⁽⁴⁰⁾。

ペアトリスとの結婚後、夫妻はより包括的な「制度的、機能的」な社会理論を発展させた。しかしホブズボームは、その核心にやはりエリート主義的な「効率」の思想をみてとる。ウェップ夫妻は、社会の構成要素として、財やサービスの質と価格に关心を持つ「消費者」と、労働条件や賃金の改善を求める「生産者」とを想定した。そしてこの両者をそれぞれ代表する「機能的集団」の衝突を、社会全体の立場から調整するパラマウントな存在として国家が指定された。しかしこの国家の決定は、高度に技術的なものであり、「アマチュア」による「いきあたりばったり」な投票の結果であってはならない、と考えられた。ホブズボームによれば夫妻は、代議制民主主義やチェック・アンド・バランスの機構を受け入れてはいた。しかし、夫妻にとって、民主主義は個人の平等な参政権に終るものではなかった。夫妻にとってそれは、「専門家によって慎重に準備された政策に対する大衆の意識的な同意を獲得する過程」に他ならなかった、とホブズボームは強調する。彼は、夫妻のこうした社会理論が、「正統的な自由主義」の伝統に対する深刻な挑戦であったと指摘し、「夫妻の中にブルラリズムを読みこむこと」に強い警告を発するのである⁽⁴¹⁾。

しかし社会改革の推進力がエキスパートの理性にあるとすれば、労働運動も自由党も、その本質的な担い手ではありえない。ここにホブズボームは、当初自由党への「浸透」を試み、一時労働者政党への期待を口にしながら、1890年代の半ばから「帝国主義の軍楽隊」のマーチに合わせて、ウェップ夫妻が「右翼にアッピール」することになった根拠を見る。もともと夫妻にとって、「効率的」な独占の出現は、非効率でアナーキーなレッセ・フェールから、秩序ある組織化の時代への巨大な前進であった。ウェップ夫妻の目には、金融資本や巨大企業に仕える人々の能力は、ケア・ハーディーらの本能的な階級意識より

自由主義への反逆と「国家的効率」

もはるかに社会にとって有用なものと映ったのである。かくて労働運動が低迷し自由党への期待が薄らぐと、夫妻はビッグ・ビジネスや帝国主義的政治家の知性と反レッセ・フェールの志向を、社会改革の梃子として利用しようとした。ホブズボームは、ウェップらと自由帝国主義者の同盟関係の奥に、こうした思想的問題が伏在していたことを示唆する。

しかしこの「右翼へのアッピール」は、「深刻なバラドックス」から免れなかつた、とホブズボームはみる。エスタブリッシュメントに対しても、労働組合や教育改革、「ナショナル・ミニマム」は、労働者のためではなく、「失われつつある帝国の経済的繁栄」の失地回復のためであると説かれた。しかし同時に労働者に対しては、それは資本家の「不労所得」を社会に取り戻してゆく過程として説明された。同様にロンドン・スクール・オブ・エコノミクスは「コレクティivism」の振興を企図しつつ、他方では、企業や官僚への「プラクティカル」な知識の普及を歌い文句として、政府や財界から援助を仰ぐことになったのである⁽⁴²⁾。

だが、シドニー・ウェップの自由党への「浸透」を支えていたのは、もともとその理論や著述ではなく、ロンドンでのシドニー・ウェップの行政上の実績であった、とホブズボームは言う。首都ロンドンで公共サービスの拡大＝「ガスと水道の社会主义」を推進したシドニーは、「ロンドンのチェンバレン」とも呼ばれ、自治体改革の全国的な指導者とみなされていた。ウイッグを失い、野にあって低迷していた自由党は、都市労働者の票をバックにした自治体のエキスパートとしてシドニーに注目し、次期自由党内閣の閣僚の椅子すら噂されていたのである。だが、ボーア戦争による自由党の分裂で、シドニー・ウェップは「自由主義は死に絶えた」という誤った判断を下した、とホブズボームはみる。かくてウェップは、「右翼にアッピール」し、自由帝国主義と統一党に接近して自由党主流からはなれ、バルフォア教育法に協力して、ロンドンの「進歩派」(Progressives) の非国教徒から浮き上がった。この結果、1906年の自由党の思いがけない大勝利の後、夫妻がポリシーメーカーとなるに必要な支持基盤は、すっかり失われてしまった、とホブズボームは分析するのである⁽⁴³⁾。

ホブズボームのみるところ労働党への参加は、「浸透」策にもマス・キャンペーンにも敗れたウェッブ夫妻にとって、残された「唯一の選択」であった。労働運動の側では、イギリス産業の相対的な衰退と産業構造の変化によって、「特權的」な労働者層の解体が進行し、19世紀の労働運動を大きく支配していく資本家からの譲歩への期待は、第一次大戦後労働運動全体から急速に薄らぎつつあった。ここに社会保障の確立、経済の再建のためのよりドラスティックな手段が求められ、フェビアンと労働組合が接近する根拠があった、とホブズボームは指摘する。だがホブズボームは、伝統的な階級意識を立脚点とする労働党が、ウェッブの社会理論そのものを受け入れたとは考えない。ウェッブの漸進主義や「ナショナル・ミニマム」は、ただ従来の労働運動を正当化すると共に、左右両翼の潮流による幅広い解釈の余地を残す「融通性」を持ったスローガンとして、労働運動によって取り上げられたに過ぎなかった、とホブズボームは観察するのである⁽⁴⁴⁾。

自由党や統一党の間を放浪してきたシドニー・ウェッブは、かくして労働党のスローガンとなり、労働党の社会主义を象徴する「神話」にまで高められた。しかしホブズボームのみるところ、ウェッブは労働党を導く機関士でも、その方角を変る転徹手でもなかった。シドニー・ウェッブは、当時の風刺画が描いた通り、ただ小さな「漸進主義」の旗を振って機関車の前を歩き、その到来を告げていたに過ぎない。ホブズボームはこうしたまことに辛辣な筆致で、フェビアン「神話」にラジカルな学問的批判を浴びせた論稿を閉じるのである。

四

ヴェバリッジについてのブリリアントな伝記を執筆したジョゼ・ハリス(José Harris)が最近改めて指摘しているように⁽⁴⁵⁾、シドニー・ウェッブは、その夥しい著作にもかかわらず、常に何程かエニグマティックな存在であった。しかしそのポートレイトにまとわりつく「神話」は、ここで検討を加えたマクブライアーや、センメル、ホブズボームらを起点とする客観的な研究の進展に

自由主義への反逆と「国家的効率」

よって剥されつつある。少なくとも、フェビアンを「福祉国家」や労働党の創設者としたり、その思想をリベラリズムの直接の継承者とみるような素朴な見解は、今日厳しい学問的、歴史的な批判にさらされねばならない。

フェビアン自身の宣伝にもかかわらず、自由党政権下での社会改革や、労働党の発展に対するフェビアンの貢献は、必ずしも大きなものではなかった。マクブライダーの客観的な分析に照らすならば、フェビアンの思想的独創性を強調したピーズや、フェビアンの社会政策史上の功績を強調したM・コールの主張にも、大きな限定が付されなければならない。しかしながらウェップらの政治的な敗北という事実は、逆に社会改革の思想としてのフェビアニズムの特異性を際立たせる結果となった。マクブライダーのように、フェビアンの「折衷的」な性格に着目するだけでは、シドニー・ウェップらの「浸透」策の独特な政治的位置とその結末の持つ歴史的な意味を充分に汲み取ることは難しい。しかし他方センメルのように、フェビアンをもっぱら帝国主義的イクスピアンションの主唱者という観点からだけ捉えることは、当時の思想状況の把握としてはやはり一面的とのそしりを免れない。

これに対してホブズボームの研究は、シドニー・ウェップをいわば自由主義と社会主義の伝統への反逆者としてとらえ、超越的な社会有機体説を土台とするエリート主義的、国家主義的な「効率」の思想をその核心に見出した。國家権力の干渉を嫌う自由主義の祖国であると同時に、鋭い階級意識に立脚する労働運動を持つイギリスにあっては、この社会改造の目標はまことに挑戦的である他はない。ホブズボームは、ウェップ夫妻の政治的マヌーバーと敗北の背後に、その思想の持つ反自由主義的、非労働者的な基調をみてとるのである。

しかしヴィクリトアン・リベラリズムの根底をなした「個人主義」からの脱却、社会有機体的観念や社会進化論の採用は、ウェップらに限られていたわけではない。既に触れたように一方には、センメルが照明を当てたピアソンやキッドら、国家間の生存競争から社会改革を導出する論者がおり、他方には、社会進化論を取り入れながらも、帝国主義に反対したマクドナルドやホブソンがいた。フェビアンも、決して一様ではなかった。ブランド(Hubert Bland)は

『フェビアン社会主義論集』の中で「浸透」に反対し、オリビィエ (Sidney Olivier) は、ボーア戦争に反対する書簡を任地ジャマイカから送った。政治学者ウォーラス (Wallas) も、バルフォア教育法と関税改革をめぐってウェップと対立し、フェビアン協会から姿を消した。アトリー政権のインパクトの下に、20世紀初頭の社会改革のドミナントな担い手としてのフェビアニズムの「神話」を再検討しようとした研究は、こうした点に触れながらも、周辺に渦を巻く諸潮流との交錯やフェビアン内部の角逐、フェビアニズムの思想的源泉の問題を必らずしも充分に掘下げようとはしなかった。ウェップ夫妻の残したパスフィールド・ペーパー (Passfield Paper) を始めとするこの時期の思想家、政治家の私文書に基づく近年の研究は、こうした諸点についても、新しい展開を示している。だがその検討のためには、稿を改めるのが適当であろう。

20世紀の初頭、フェビアン協会の中からウェップらに反旗を翻したウェルズ (H.G. Wells) は、ウェップらをモデルとした小説の筆を執った時、『ニュー・マキャベリ』(New Machiavelli) という象徴的な表題を選んだ⁽⁴⁶⁾。言うまでもなく、それはウェップ夫妻の「浸透」策が、社会主義の本義を忘れた権謀術数に過ぎないという痛烈な批判を意味していた。しかしまキャベリの君主と同じく、その背後にはウェップの仕えた運命の女神があった。そしてこの女神に従うことは、特有な意味においてイギリスの政治的伝統への挑戦であり、実り少ない茨の道を歩むことだったのである。

〈注〉

- (1) Sidney Webb, 'What Socialism Means: A Call to Unconverted', *Practical Socialist*, vol. 1, No. 6, June 1886, p. 92.
- (2) もっとも、フェビアン協会の中には、当初社会民主連盟にも加わり、その「革命」に期待を寄せる人々も少なくなかった。Bernard Shaw, *The Early History of the Fabian Society, Fabian Tract 41* (London, 1st published 1892). を参照。
- (3) Sidney Webb, 'Historic (Basis of Socialism)' in Bernard Shaw (ed.), *Fabian Essays in Socialism* (London, 1st ed. 1889, reprint ed., 1950), p. 32.
- (4) ただし、後にも触れるようにこのことは、ウェップの思想が労働党全体のイデオロギーとなったことを直ちに意味するものではない。労働党は、「社会主義者

自由主義への反逆と「国家的効率」

を含む急進派の連合体である。……労働党は、（労働者の利益の擁護という）ネガティブな意味において団結しているのである。」（括弧内 岡田） Allan Ball, *British Political Parties: The Emergence of a Modern Party System* (London, 1981), pp. 241–242. また「階級意識」を推進力とする労働党の発展は、「政治的イデオロギー」を排斥していた、とするマクキビンの主張をもみよ。 Ross Mckibbin, *The Evolution of the Labour Party, 1910–1924* (Oxford, 1974).

- (5) 「労働党の最初の14年間、私が党の執行委員会でフェビアン協会を代表していた。ウェップはこれに殆ど関心を示さなかった。」 E.R. Pease, 'Webb and the Fabian Society', in M. Cole (ed.), *The Webbs and Their Work* (London, 1949), pp. 21–22.
- (6) シドニー・ウェップの「立憲的」、「漸進的」社会主義の思想を、革命的な社会主義と対置してその差異を分析することは、これまでもしばしば試みられてきた。しかし、シドニー・ウェップは革命的な潮流の撲滅だけに心血を注いだ人物ではなかった。彼は進んで社会主義者の世界から出て、さまざまな政治潮流と切り結んでいったのである。従って、シドニー・ウェップに即して彼の思想と業績を考えるとすれば、社会主義思想の中における対立に目を向けるだけでは充分ではない。彼の活動半径に相応しい広い視野のもとにシドニー・ウェップを置き、さまざまな思想的、政治的な諸潮流との交錯を解きほぐしていくことが必要なのである。
- (7) 本稿は、フェビアニズムや新自由主義を中心とする後期ヴィクトリア朝からエドワード朝の政治思想についての研究動向を全体としてサーベイしようとする論稿の序論部分をなしている。本稿で取り上げた研究以後の動向については、別稿において検討が加えられるであろう。なお、本稿は日本における研究の状況を念頭において執筆されてはいるが、我国での研究史それ自体は、異文化を背景とした思想の受容と反発の歴史として、別の視点から取り上げるのが妥当であろう。
- (8) E.R. Pease, *The History of the Fabian Society* (London, 1916), p. 236.
- (9) *Ibid.*, pp. 108–109, 111–112, 144, 224.
- (10) *Ibid.*, pp. 117–119. ピーズは、1895年から1905年に至る自由党との交渉については描写していない。
- (11) Mary A. Hamilton, *Sidney and Beatrice Webbs* (London, 1934); Lord Beveridge, 'Sidney Webb (Lord Passfield) 1859–1947', *Economic Journal*, vol. LVIII, September 1948; R.H. Tawney, 'Beatrice Webb 1858–1943', *Proceedings of the British Academy*, vol. XXIX, 1945; R.H. Tawney, 'In Memory of Sidney Webb', *Economica*, November 1947; R.H. Tawney, *The Webbs and their Work* (London, 1947); R.H. Tawney, *The Webbs in Perspective* (London, 1953); G.K. Lewis, 'Fabian Socialism: Some Aspects of Theory and Practice', *Journal of Politics*,

- vol. XIV, August 1952; J. D. Clarkson, 'Background of Fabian Theory', *Journal of Economic History*, vol. XIII, no. 4, 1953; Anne Freemantle, *This Little Band of Prophets: The Story of the Gentle Fabians* (London, 1960) 等。紙幅の関係上これらについてはここでは論及できない。1960年代半ばまでの網羅的なビブリオグラフィーは、後述のマクブライアーノ著書、第二版巻末を見よ。
- (12) Margaret Cole, *Beatrice Webb* (London, 1945, 久保まち子訳, 『ウェッブ夫人の生涯』, 新版, 誠文堂新光社, 1982年, *The Webbs and their work*, op. cit.; *Beatrice Webb's Diaries 1912-24* (London, 1952); *Beatrice Webb's Diaries 1924-32* (London, 1956); *Beatrice and Sidney Webb, Fabian Tract no. 297* (London, 1955).
 - (13) Margaret Cole, *The Story of Fabian Socialism* (London, 1961), pp. 327-332.
 - (14) *Ibid.*, pp. 45-47, 83-88, 95-110.
 - (15) *Ibid.*, pp. 332-335.
 - (16) A. M. Macbriar, *Fabian Socialism and English Politics, 1884-1918* (Cambridge, 1962), pp. 356-349.
 - (17) *Ibid.*, pp. 245-246.
 - (18) Sidney Webb and Bernard Shaw, 'To Your Tents O Israel!', *Fortnightly Review*, 1 November 1893.
 - (19) Sidney Webb, 'Lord Rosebery's Escape from Houndsditch', *Nineteenth Century*, September 1901.
 - (20) Macbriar, *op. cit.*, pp. 255-256.
 - (21) *Ibid.*, pp. 259-262.
 - (22) *Ibid.*, pp. 263-285.
 - (23) *Ibid.*, pp. 280-285.
 - (24) *Ibid.*, pp. 305-306.
 - (25) *Ibid.*, p. 327.
 - (26) Bernard Semmel, *Imperialism and Social Reform: English Social-Imperial Thought* (London, 1960), pp. 32-50, 59-61. 野口建彦他訳, 『社会帝国主義史』みすず書房, 1982年。
 - (27) *Ibid.*, p. 51.
 - (28) Bernard Shaw (ed.), *Fabianism and Empire* (London,).
 - (29) Semmel, *op. cit.*, pp. 73-77, 81-82, 128-134.
 - (30) M. Freedon, *The New Liberalism: An Ideology of Social Reform* (Oxford, 1978), p. 80. におけるセンメルに対する批判をみよ。
 - (31) E. J. Hobsbawm, *Fabianism and Fabians, 1884-1914* (unpublished thesis in Cambridge University Library, 1950), p. 164. ただし, ホブズボームはマクブライアーノ著書のオックスフォードでの学位論文 (A. M. Macbriar, *Fabian Socialist*

自由主義への反逆と「国家的効率」

- Doctrine and Its Influence in English Politics, 1884–1918*, Bodleian Library, Oxford, 1949) には既に目を通していた。
- (32) *Ibid.*, p. 32.
 - (33) E. J. Hobsbawm, ‘Fabian Reconsidered’ in his *Labouring Men; Studies in the History of Labour* (London, 1964), p. 266. この論文の中でホブズボームは、フェビアンを、ポスト・レッセ・フェールの時代の「新社会層」の表現とみるという論点を敷衍している。ただし、フェビアンの思想の内的な分析を行なった学位論文の最も重要な部分は含まれていない。また小さな彼のパンフレット *The Lesser Fabians, no. 28 of Our History* (London, 1962) も、学位論文の一章の内容を含んでいるにすぎない。
 - (34) Hobsbawm, *Fabianism and Fabians*, *op. cit.*, pp. 1–7.
 - (35) *Ibid.*, pp. 16–17.
 - (36) *Ibid.*, pp. 39–40.
 - (37) *Ibid.*, p. 41. ただし、ホブズボームは明言してはいないが、社会有機体の生存論争を「効率」のタームで捉えることは、単なる軍事的拡張論とは、視点を異にしている、と言うべきであろう。センメルの把握との差異に留意すべきである。
 - (38) *Ibid.*, pp. 47–48.
 - (39) *Ibid.*, pp. 49–50
 - (40) *Ibid.*, p. 52.
 - (41) *Ibid.*, pp. 59–69. ホブズボームは、結婚後の夫妻の社会理論は、結婚前のシドニーのそれとは「大きく変化」したとする。しかしこの中でシドニーの「効率」の思想はむしろ「発展」を遂げたと言うのである。なお、ホブズボームは、結婚後の夫妻の思想を正確に区別することは、極めて難しいと考える。とはいっても自身、「ラジカル」な伝統に育ったシドニーと、上流社会にコンタクトを持ち、「神秘主義」の傾向のあるペアトリスとの差異を暗示している。
 - (42) *Ibid.*, pp. 67–68.
 - (43) *Ibid.*, pp. 134–142. ホブズボームは、この「あまりにも近視眼的」な「右翼へのアピール」は、一面ではホールディンらによって「流された」結果であったとみる。しかし同時に、ウェップラにはそうした方向へ流されてゆく内的契機が存在したことを指摘するのである。
 - (44) *Ibid.*, pp. 157–158, 161–162.
 - (45) José Harris, ‘The Webbs’ in Paul Barker (ed.), *Founders of the Welfare State* (1st published by Heineman London, 1984 reprinted by Gower, Aldershot, 1986).
 - (46) H. G. Wells, *The New Machiavelli* (London, first published 1911, Reprinted 1985).

